

佐久の先人事業



事業の経過

佐久には多くの先人が残した業績があり、形や風景として残されているものや、語り継がれているものがあります。小さな農村が集まった佐久には、私財を投じて事業に取り組んだ人、大勢に流されることなく信念を貫いた人、またこうした人たちを受け入れ支えた地元の人達など独特の風土があります。この事業は、こうした先人を後世に語り継いで行くため、平成22年度から始まり、第一次から第三次まで計53人を選定しました。

市ホームページでの紹介

選定された先人や、広報別冊での紹介文、ゆかりの場所などを掲載しています。また、現在 Youtube 配信動画の作成も行っています。



QRコード



佐久の先人 (一)

冊子「佐久の先人」販売

佐久の先人(一)、(二)について、1冊 500 円(税込)で販売しています。

【販売場所】:文化振興課、川村吾蔵記念館、五郎兵衛記念館、天来記念館、望月歴史民俗資料館、中央公民館、浅間公民館、野沢公民館、中込公民館、臼田公民館、浅科公民館、東公民館



佐久の先人 (二)

佐久の先人冊子(一) 36名

1	いちかわごるべえ 市川五郎兵衛	1572～1665	〈用水開削の祖〉米は古くから日本人にとって、いちばん大切な食べ物であるが、水がないと稲が育たない。五郎兵衛は多くのお金と砥石山のトンネルを掘る技術をつかって用水を完成させた。※
2	こばやしまごさえもん 小林孫左衛門	1721～1756	〈宝暦騒動の中心的農民〉小林孫左衛門は割元という重職にあったが、役所の年貢収奪に強い不満を持っていた。1754(宝暦4)年、浅間山の噴火に早魃が重なったため、強い義侠心から仲間とともに全藩一揆を主導したとされている。※
3	うすだたんにもん 臼田丹右衛門	1776～1857	〈佐久鯉を改良した〉海から遠い佐久では、鯉は生きたまま料理できる食べ物として大事にされてきた。その鯉と淀川から運んだ鯉を交配させて、おいしく栄養のある鯉を育てた。佐久の人々の努力と工夫によって、鯉料理は佐久のおいしい味として人々を喜ばせている。※
4	いちかわ だいじろう 市川 代治郎	1826～1896	〈旧中込学校を建てた棟梁〉江戸末期、築地西本願寺修復で自信を得た市川代治郎は、アメリカにわたって洋風建築を学んだ。帰国後郷里の学校建築の設計・施工を引き受け、現存する洋風学校建築では最も古い中込学校を完成させた。※
5	まつもと たにさち 松本 谷吉	1836～1923	〈日本で初めてカラマツ育苗を成功させた〉荒れた山林に緑を取り戻そう、カラマツは成長も早く、建築・橋梁・坑木など用途も広い。農業と行商で暮らしていた二人は、この苗を生産して植林に役立てたいと考え、日本で初めて種子からのカラマツ育苗を成功させ、世界の緑化に大きく貢献した。※
6	しみず せいさち 清水 清吉	1848～1902	
7	いちかわ またぞう 市川 又三	1838～1909	〈明治政府に尺度統一を建白した〉明治のはじめ、市川又三はこれまでばらばらだった尺度を統一するため、私財を投じて再三にわたり政府へ建白書を提出した。こうした行動は後の「度量衡取締条例」や「度量衡法」制定へとつながることとなった。※
8	おぎょう ゆずる 大給 恒	1839～1910	〈五稜郭築城と日赤創設〉五稜郭といえば、全国ほとんどの人が函館と答えるが、それが信州にもある。佐久市田口の「もう一つの五稜郭(龍岡城)」は青年藩主松平乗謨(のち大給恒と改名)が、激動の幕末に築いたわが国最後の城である。※
9	よだ かどう 依田 稼堂	1851～1914	〈塾を開いて漢詩文を教えた先生〉東京で漢詩文を学んで帰った稼堂は、友人たちと学びあいながら、多数の漢詩文を作った。また佐久の野沢・岩村田・前山・桜井などで塾を開いて、千人を超す人々に漢詩文を教えた。※

10	おかむら まさこ 岡村 政子	1858～1936	〈明治の先端を生きた石版画家〉明治初期に佐久から上京した政子は、正教会の女学校に寄宿しながら、日本初の公立美術学校であった工部美術学校の一期生として洋画を学んだ。その後、夫の岡村竹四郎とともに石版印刷会社信陽堂を起し、数々の石版画を世に送り出した。
11	こうづ くにたろう 神津 邦太郎	1865～1930	〈西洋式牧場をつくった〉明治の世に入ってヨーロッパから多くの食べ物が入ってきた。神津邦太郎は田や畑にならない山の斜面を利用して、牧草を育て乳牛を飼い、バターをつかって日本人の体力を向上させようと願った。※
12	さとう とらたろう 佐藤 寅太郎	1866～1943	〈信州教育の充実に尽した教育者〉信濃教育会会長を15年つとめ信濃教育会の基礎を築くとともに、長野県立工業学校(現長野工業高校)の設立、松本高等学校(現信州大学)の誘致、長野県立図書館の設置、信濃教育会館の建設など、信州教育の充実に尽した教育者。※
13	おおい とみた 大井 富太	1868～1928	〈佐久鉄道をつくった〉明治になって佐久へ信越線が入ってきたが、北の浅間山のふもとを通っていた。南佐久の人々は太井富太を中心に、みんなの力を合わせて、小諸から小海まで蒸気機関車を走らせ、人々に便利を与え、産業を発展させた。※
14	こうづ どうへい 神津 藤平	1871～1960	〈ふるさとを想い志賀高原と命名した実業家〉神津藤平は若い頃から薬用人参・牛馬の改良・発電・銀行と佐久の産業を発展させた。彼はさらに夢を広げ、河東鉄道、長野電鉄そして志賀高原の観光開発へと、事業ひと筋に88年の生涯を生きた信念の先覚者である。※
15	ひだい てんらい 比田井 天来	1872～1939	〈現代書道の基礎を築いた書家〉書の研究を深めた天来は、中国古典の用筆法を発見して書道界に大きな影響をもたらし、ここから現代書道の新しい潮流が生まれた。書家として初めて芸術院会員となった天来、また故郷をこよなく愛した人であった。※
16	せじも きし 瀬下 清	1874～1938	〈信州財界の救世主〉三菱の会長でありながら、その生涯を“銀行小僧”で通した金融マン。昭和恐慌で危機にひんした信州二大銀行を統合、「八十二銀行」として誕生させた功績は、信州経済史に不滅の光を放っている。※
17	しのはら わいち 篠原 和希	1881～1930	〈全生涯を小海線全通に〉一介の新聞記者ながら、小海線全通期同盟委員長になり、その生涯を小海線にささげた政治家。だが、全通を前に急死、晴れの祝賀会では小海線全通功労者として、その名を呼べども彼の姿はなかった。※
18	こうづ たけし 神津 猛	1882～1946	〈佐久の文化と産業を支えた〉志賀の豪農に生まれた猛は、若い頃に東京で学んだ学問を故郷に生かし、佐久の考古学や文学を育てた。日本の産業が近代化すると、家の資産をもとに銀行を開いて、東北信の製糸業を支えた。佐久の文化を高め、金融や産業の発展につくした人であった。※
19	さくらい やいちろう 桜井 弥一郎	1883～1958	〈早慶第一戦の勝利投手〉日本の野球は、王・長嶋の登場でプロ野球の黄金時代を迎えたが、それまでは学生野球が人気の的で、その開幕を飾る早慶戦第一戦は慶應に凱歌、桜井弥一郎は歴史に残る勝利投手に輝いた。
20	かわむら ごぞう 川村 吾蔵	1884～1950	〈アメリカで活躍した彫刻家〉アメリカで彫刻を学んだ川村吾蔵は、酪農家の依頼で「完全なる乳牛模型」を制作し、牛のGOZOと名を高めた。彼は野口英世、マッカーサーなど名高い人々の胸像を造ったが、それは深い人間性を表現するものであった。※
21	こいけ もりたろう 小池 森太郎	1887～1933	〈佐久に自動車交通網を築いた〉自転車のスピードにあこがれ、野沢で自転車店を開いて佐久の人々に自転車を普及させた森太郎は、自動車が走るようになると、乗合自動車やトラックを走らせて人々に喜ばれ、産業の発展に大きな貢献をした。※
22	こいけ ゆうすけ 小池 勇助	1890～1945	〈女子学徒の命を救った軍医〉郷里で眼科医院を開業していた小池は、戦争の渦に飲みこまれ、軍医として各地に出征。最期の地となる沖縄で学徒隊の少女らを預かることとなる。戦闘が激化し命の危険が迫る中、少女たちに「絶対に死んではならない」と最後の言葉を伝えた。※
23	やなぎもと 柳本 みつの	1894～1976	〈三千人を超える赤ちゃんをとりあげた助産師〉戦中戦後の苦しい時代、女手一つで八人の子どもたちを育て上げることがわら、みつのは助産婦として3,000人を超える赤ちゃんをとりあげた。自分の苦勞を外に出さず、地域の人たちのために尽した善行の数々は、永遠の母として今なお語り継がれている。
24	こばやし たつえ 小林 多津衛	1896～2001	〈平和と民芸を語り続けた教育者〉柳宗悦や武者小路実篤の影響を強く受けた小林多津衛は、その精神を教育に生かし、民芸の普及と平和実現のために生涯をささげた。郡志編纂や天来研究はその後の地域文化発展に大きな役割を果たしている。

25	たがわ すいほう 田河 水泡	1899～1989	〈のらくろ描いて半世紀〉戦前の小学校へ通った人なら、誰でも忘れられないマンガは『のらくろ』だろう。主人公の『のらくろ』は、当時の子どもは兵隊ごっこが大好き、という世相に乗って、のらくろを兵隊に仕立て、10年にわたって連載、戦後篇を加えると、実に半世紀も愛された長編マンガだ。
26	もりいずみ たけしげ 森泉 武重	1903～1988	〈平根発電所と浅間病院の創設に貢献した〉農業用水路を利用した自家水力発電所を建設し農村電化を促進すると共に、村内に工場を誘致して村の活性化を実現した。また、国保浅間病院創設のため、東京大学に医師派遣をねばり強く懇願し、その実現に貢献した。
27	まるおか ひでこ 丸岡 秀子	1903～1990	〈農村女性の解放に生涯をささげた〉土に根を張って生きる女たちに、秀子は自分の思いをやさしく、時にきびしく教えてくれ、それは母親のような存在だった。評論や多くの執筆を通して、心から平和を願い命の大切さを説いた。
28	やまむろ しずか 山室 静	1906～2000	〈アンデルセンやムーミンを日本に紹介した詩人〉旧制野沢中学を卒業後、小学教員を経て上京。職を転々とした後、東北大美学科卒業。日本女子大教授を勤めながら、神話や昔ばなし等の研究を続け、北欧諸国の児童文学を紹介。ムーミン・シリーズを訳出して「ムーミンを連れてきた人」と呼ばれる。
29	なかざわ しゅうぞう 中澤 周三	1907～1991	〈五郎兵衛用水中興の祖〉県営土地改良事業への早期取り組みに併せ市川五郎兵衛翁の遺徳を継ぎ、五郎兵衛用水の大改修と鹿曲川から御牧ヶ原台地への用水の開発に情熱を燃やし、地域発展に貢献した政治家。
30	そうま せんし 相馬 遷子	1908～1976	〈中央俳壇で活躍した近代俳人〉野沢町(現佐久市野沢)に生まれ、親の転居に伴い小学生の時に一旦この地を離れたが、何かの力に引き寄せられるように、生れ育った父祖の地へ戻り医院を開業し、そして中央俳壇で有力な俳人として活躍した人。
31	たけうち よしみ 竹内 好	1910～1977	〈日中友好に尽した文学者〉太平洋戦争の応召直前に『鲁迅』を執筆、戦後は日中国交回復の障害になるとして新安条約強行採決に抗議して東京都立大学教授を辞任するなど、近代日本のありかたを中国との関係のなかで問い続けた現代中国文学者。
32	たなか ふみお 田中 文雄	1910～1998	〈緑とともに生きた生涯〉「太陽は緑を呼び、緑は平和と生長のしるし……」。王子製紙の社長だった田中文雄は、同社の創立百周年記念碑にこう刻んだ。彼は緑が好きだ。その緑多き木材を原料とする製紙業界の道を歩み、緑とともにその生涯をつらぬいた。
33	わかつき としかず 若月 俊一	1910～2006	〈農民とともに地域に生きた医師〉わずか20床の農協病院に赴任した若月俊一は、地域の人々のために寝食を忘れて診療し、健康管理活動や農村病の研究も進めた。彼の「弱い立場の人たちと生きる」精神は地元の熱意にも支えられ、ベッド1,000余床、職員1,900人の病院に発展させた。若月の名は、農村医療と農村医学の開拓者として、国内だけでなく、海外にも知られる。
34	い で いちたろう 井出 一太郎	1912～1996	〈清廉一筋の歌人政治家〉三木内閣の官房長官だった井出一太郎は、閣議の席で岩波文庫の「日暮硯」を配った。これは信州松代藩の家老恩田木工が財政窮乏のなか、その改革に当たったときの記録。国政に当たる者もこれを経緯の書として必読をすすめた。歌もよむ文人政治家らしい政治姿勢だ。
35	よしざわ くにお 吉沢 國雄	1915～2008	〈インスリン自己注射への道を開いた医師〉インスリン自己注射の保険適応に尽力するなど長野県の糖尿病医療の礎を築いたバイオニアである。また保険・予防活動にも積極的で、住民への啓発活動、人材育成から診療にいたるまで真の「地域医療」を実践した。
36	まつい こうせい 松井 康成	1927～2003	〈人間国宝に認定された陶芸家〉佐久に生まれ、茨城県笠間町の住職となった松井康成は、「練上」という手法で新しい陶芸の世界を生み出し、人間国宝に認定された。彼の作品には物と心の統一があるという。没後、遺族から信濃美術館へ100点に及ぶ作品が寄贈された。

佐久の先人冊子(二) 17名

37	せじも のぶただ 瀬下 敬忠	1709～1789	〈江戸時代中期の俳人・歴史家〉東信濃に蕉風の俳壇を広め、俳文の世界でも横井也右に肩をならべるような、豊かな知識と趣きを見せた。また、『千曲之真砂』などの歴史・地誌研究にも大きな業績をあげた。
38	きとう さいか 佐藤 採花	1844～1901	〈幕末・明治を生き抜いた女流俳人〉明治維新という世相の大きな変革期を俳句一筋に生き抜いた女流俳人。全国を巡り自己を磨き続けたが、望郷の念強く、常に郷里に想いを馳せていた。俳句を通じて、佐久地方の文化に大きな足跡をのこした。

39	こまつ はじめ 小松 大	1848～1896	〈地域づくりと自由民権に生きた医師〉幕末から明治という激動の時代に、医師として地域に病院をつくり、住民の生活向上をめざして学校を建設し銀行を設立する。自由民権運動にも力を尽した。
40	はやかわ ごんや 早川 権弥	1861～1921	〈佐久の自由民権運動を实践した〉自由と平等の精神をもって自由民権運動に励み、長野県議会では、廃娼運動を推進し、国会議員として、戦争の増税に反対するなど、明治の佐久を代表する政治家であった。
41	おかべ じろう 岡部 次郎	1864～1925	〈ハワイ日本人移民団に尽した〉若き日、ヒューマニズムに燃えてキリスト教会の牧師としてハワイに渡り、日本人移民団を守るために力を尽した。後半生は、郷里に戻り、衆議院議員となり、閥族打破、憲政擁護を求めて奔走した。
42	ともの ぶんたろう 伴野 文太郎	1869～1934	〈小学校教員で融和教育の先駆者〉長野県師範学校で校長浅岡一、教諭大江磯吉の感化を受け、郷里で先駆的な「融和教育」をおこない、晩年には県下初の赤十字少年団を結成させた。
43	かわむら はちろう 川村 八郎	1881～1961	〈戦後いち早く福祉事業を進めた町長〉太平洋戦争後の新憲法での住民による直接選挙の第1回統一地方選挙で町長に選ばれ、いち早く社会福祉事業の推進に取り組み、養老施設・知的障がい者施設を開設し、その後も組合立の救護施設を設置した。
44	みつし かつごろう 三石 勝五郎	1888～1976	〈佐久の生んだ大詩人〉「指押の心 母ごころ 押せば生命の泉わく」この旋律のよさは、まさに勝五郎の生涯そのものと言えるだろう。髭のおじいさんと呼ばれ、ふるさと佐久をこよなく愛し、また故郷の人々に心から愛された放浪の詩人であった。
45	こうづ こうじん 神津 港人	1889～1978	〈佐久の洋画のパイオニア〉負けず嫌いでブライない画家だと、彫刻家・斎藤素巖は評した。新しい流派が次々と日本に紹介された時代、潮流にのらず、写実志向を貫き豊かな色彩表現を展開した。佐久における洋画のパイオニアとして、郷土の美術文化に確かな足跡を残した。
46	あべ りょうたろう 阿部 良太郎	1894～1966	〈警廃事件で政治にめざめた浅間町長〉青年会長として岩村田警察署廃止反対運動の先頭に立ち、民衆の声を無視する官僚政治を正そうとした。太平洋戦争後は岩村田町・浅間町の町長として、農業用水の改良や上水道の敷設に力を入れ、町民の生活向上と民主化に尽した。
47	きうち たかね 木内 高音	1896～1951	〈宮澤賢治の才能を見出した童話作家・編集者〉鈴木三重吉が創刊した『赤い鳥』に数多くの童話を執筆するとともに、中央公論社編集者として三重吉の『綴方読本』、豊田正子の作文を集めた『綴方教室』をはじめ、川端康成・久保田万太郎・国分一太郎・坪田譲治・小川未明などの作品を世に送り出した。
48	いわた けんじ 岩田 健治	1897～1961	〈子ども・農民・村を愛したヒューマニスト〉子どもたちの個性を尊重し、自主的・民主的な教育を実践する中で、二・四事件で検挙された。免職後は農村の立て直しに信念をもって尽した。「世の毀誉(そしることとほめること)に恐るゝことなく一日の名誉を捨て、永久の名誉を追ふ」(岩田の日記より)
49	しみず たかじろう 清水 鷹次郎	1902～1931	〈大正に設立されたプロ野球団の主力選手〉日本のプロ野球第1号と伝えられている読売巨人軍よりも、13年も早く「日本運動協会」が誕生した。その野球チームの主力選手。昭和のはじめ佐久への郷土訪問野球で好プレーを披露。満場の野球ファンをうならせた。
50	さくらい わいち 桜井 和希	1902～1986	〈ドイツ語学者の学習院長〉戦後、一般にも開放された学習院で、院長に選ばれたドイツ語教授。戦時中の“海軍院長”、戦後の“一高院長”の後をうけ、新時代にこたえた“国際人院長”だ。
51	ゆい いちじ 油井 一二	1909～1992	〈故郷に美術館を贈った実業家〉上京して様々な職業を経験するが、画商の道に活路を見だし、さらに美術年鑑社長として、天性の企画力と実行力により成功し、そのコレクションの寄贈を受け佐久市立近代美術館が誕生した。
52	よだ いさお 依田 勇雄	1911～1993	〈財政再建を成し遂げた初代佐久市長〉県議会議員から初代佐久市長に転身。当時財政赤字が生じ、財政再建団体であった佐久市を再建に導く。優れた先見性をもって、北陸新幹線・高速道路誘致を働きかけるなど、佐久市の創世期を担う。
53	かしま まこと 樫山 信	1913～1979	〈戦後、佐久工業界の起業パイオニア〉戦後、佐久において多くの企業が創業した。先陣を切り合理的な工場経営モデルを示し、工業界のリーダーシップをとり、プレーキシューを世界的なブランドに作り上げた。

※印の先人は、Youtubeにて動画の配信を行っています。それ以外の先人も現在動画の作成を進めています。